

社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観を育成するための幼小中一貫のカリキュラム開発

広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校

1. はじめに

本学校園の新領域「希望（のぞみ）」及び「希望（のぞみ）視点の保育」の取り組みは、4年目を迎えた。社会のグローバル化に対応する資質・能力を「人間関係形成・社会形成能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」とし、これらの資質・能力を通教科的能力として位置づけ、新領域「希望（のぞみ）」及び「希望（のぞみ）視点の保育」だけでなく、学校教育活動全体を通して育成するものと位置付けた（図1・図2を参照）。

これらの資質・能力育成の取り組みは、『各附属・学校園における特色ある取り組みと「グローバル人材育成への対応表」（改訂版）』（岩田 2015）にある要素Ⅰ「コミュニケーション」、その他の要素「問題解決能力」、要素Ⅱ「主体性・積極性」「チャレンジ精神」、要素Ⅲ「異文化理解」に関連するものである（表1）。

表1 本学校園で育成する社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観と各附属・学校園における特色ある取り組みと「グローバル人材育成」への対応表との関連

本学校園で育成する社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観	各附属・学校園における特色ある取り組みと「グローバル人材育成」への対応表	三原
資質・能力 「キャリアプランニング能力」 「人間関係形成・社会形成能力」 「課題対応能力」 態度・価値観 「自律」 「共生」 「参画」	要素Ⅰ 要素Ⅰ～Ⅲの基礎となる心情・意欲・態度	
	要素Ⅰ 語学 コミュニケーション	◎
	その他の要素 ICT活用能力	○
	その他の要素 問題解決能力 批判的思考	◎
	要素Ⅱ 主体性・積極性 チャレンジ精神 協調性・柔軟性 責任感・使命感	◎ ◎
	要素Ⅲ 異文化理解 アイデンティティ	◎

2. 研究開発における社会のグローバル化に対応する取り組み

研究開発課題

「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域を核とした自己開発型教育の研究開発」

(1) 「希望（のぞみ）」における社会のグローバル化に対応する取り組み

「希望（のぞみ）」において、異文化理解や他国の方々とのコミュニケーションを通して「なりたい自分」を考えていけるような幼小中 12年間の系統性のある活動及び単元を実践してい

く。この取り組みにより、社会のグローバル化に対応するための資質・能力及び態度・価値観を育成する。

(2) 保育・教科等における社会のグローバル化に対応する取り組み

新領域「希望（のぞみ）」や「希望（のぞみ）視点の保育」で培う社会のグローバル化に対応する資質・能力を通教的能力と位置づけ、保育・教科の本質に根ざした資質・能力との関連を明らかにし、全教育課程において育成に取り組む。その際、グローバル人材育成を念頭においた活動・単元の開発を行っていく。

新目標構造〈H27年度版〉			
【目標、育成する資質・能力、形成される態度・価値観】			
「希望（のぞみ）」の目標	自己についての理解を図り、自己の生き方・あり方についての具体的な目標や課題を明らかにする中で、社会的自立の基礎となる資質・能力を育てるとともに、社会の形成者として必要な態度及び価値観を養う。		
形成される態度・価値観と態度・価値観が形成された子どもの姿 【中学校修了時】			
自律 「なりたい自分」に向かって目標をもち、最後までやりきる大切さに気づく。			
共生 様々な人とかわる中で、相手の気持ちを尊重しながら伝え合うことの楽しさや大切さに気づく。		参画 よりよい集団や社会をめざし、自らすすんで問題を見つけ、その解決に向けて具体的に計画・立案・実行することの大切さに気づく。	
育成する資質・能力	人間関係形成・社会形成能力 （関係を構築する力）	キャリアプランニング能力 （なりたい自分になる力）	課題対応能力 （達成へ向かう力）
資質・能力が育成された子どもの姿 【中学校修了時】	相手の立場や気持ちを尊重しながら考えを分かりやすく伝え合ったり、相手の考えから自分自身を客観的に見つめたりするとともに、全体の状況を見通しながら、集団のさまざまな意見に折り合いをつけ、全体の意見としてまとめていくことができる。	役割や仕事に責任をもって取り組んだり、意欲をもって学んだりしながら、自分と社会とのつながりについて考え、自分の将来や生き方を描くことができる。	地域社会とのかわりの中で、新たに挑戦してみたいことを見つけて、見直しをもって計画立案を繰り返し、自ら目標を決め、最後まで行動することができる。
【資質・能力に係る、年少から9年までの学年区分ごとの最終学年の目標】			
【学年区分】 最終学年	人間関係形成・社会形成能力 （関係を構築する力）	キャリアプランニング能力 （なりたい自分になる力）	課題対応能力 （達成へ向かう力）
【入門期：年少・年中】 年中	・自分の思いを言葉や態度で伝えたり相手の思いに気づいたりするとともに、相手の様子を見て、自分がよいと思ったことを行動しようとする。	・自分の役割や仕事に意欲をもって取り組み、みんなの役に立つことに喜びを感じるようになる。	・教師や友だちとやり方を考えながら、自分がしたいことを繰り返しやってみようとする。
【幼小接続期：年長・1年・2年】 2年	・自分の思いを相手に分かるように言葉や態度で伝えたり、相手の思いに気づいて受けとめたりするとともに、相手やまわりの様子を見て、自分なりに行動することができる。	・自分の役割や仕事に責任をもって取り組み、みんなのためになることを自分たちなりに考えることができる。	・教師や友だちにアドバイスをもらいながら目標や方法を決め、自分にできることを継続して行うことができる。
【中間期：3年・4年】 4年	・相手の立場や気持ちを認めながら考えを伝え合うとともに、小集団の状況を見て、なかまと一緒に試行錯誤しながら集団として活動することができる。	・役割や仕事に責任をもって取り組み、その体験をふり返りながら、日々の自分のあり方について考えることができる。	・身近な集団の中で、課題解決に向けて多様な方法を考え、目標をもちながら最後まで行動することができる。
【小中接続期：5年・6年・7年】 7年	・相手の立場や気持ちを尊重しながら考えを分かりやすく伝え合うとともに、小集団の活動を中心としながら全体の状況を見て、友だちの意見をまとめることができる。	・役割や仕事に責任をもって取り組んだり、意欲をもって学んだりしながら、自分と社会とのつながりに気づき、自分の生き方について考えることができる。	・身近な集団や社会の中で、課題解決に向けて多様な方法からより適切な方法を選び、自ら目標を決め、最後まで行動することができる。
【最終期：8年・9年】 9年	・相手の立場や気持ちを尊重しながら考えを分かりやすく伝え合ったり、相手の考えから自分自身を客観的に見つめたりするとともに、全体の状況を見通しながら、集団のさまざまな意見に折り合いをつけ、全体の意見としてまとめていくことができる。	・役割や仕事に責任をもって取り組んだり、意欲をもって学んだりしながら、自分と社会とのつながりについて考え、自分の将来や生き方を描くことができる。	・地域社会とのかわりの中で、新たに挑戦してみたいことを見つけて、見直しをもって計画立案を繰り返し、自ら目標を決め、最後まで行動することができる。

図1 「希望（のぞみ）」目標構造

平成 27 年度 研究構造図

めざす子ども像

様々な人々とともに、積極的に粘り強く課題解決に取り組む中で、
社会において有為な人となるべく自己の向上を図る子ども

目 標

自己についての理解を図り、自己の生き方・在り方についての具体的な目標や課題を明らかにする中で、
社会的自立の基礎となる資質・能力を育てるとともに、社会の形成者として必要な態度・価値観を養う。

態度・価値観	共 生	自 律	参 画
資質・能力 (通教科的能力)	12年間で育成する「社会の中で『真に生きてはたらく力』」		
	人間関係形成・ 社会形成能力	キャリアプラン ニング能力	課題対応能力

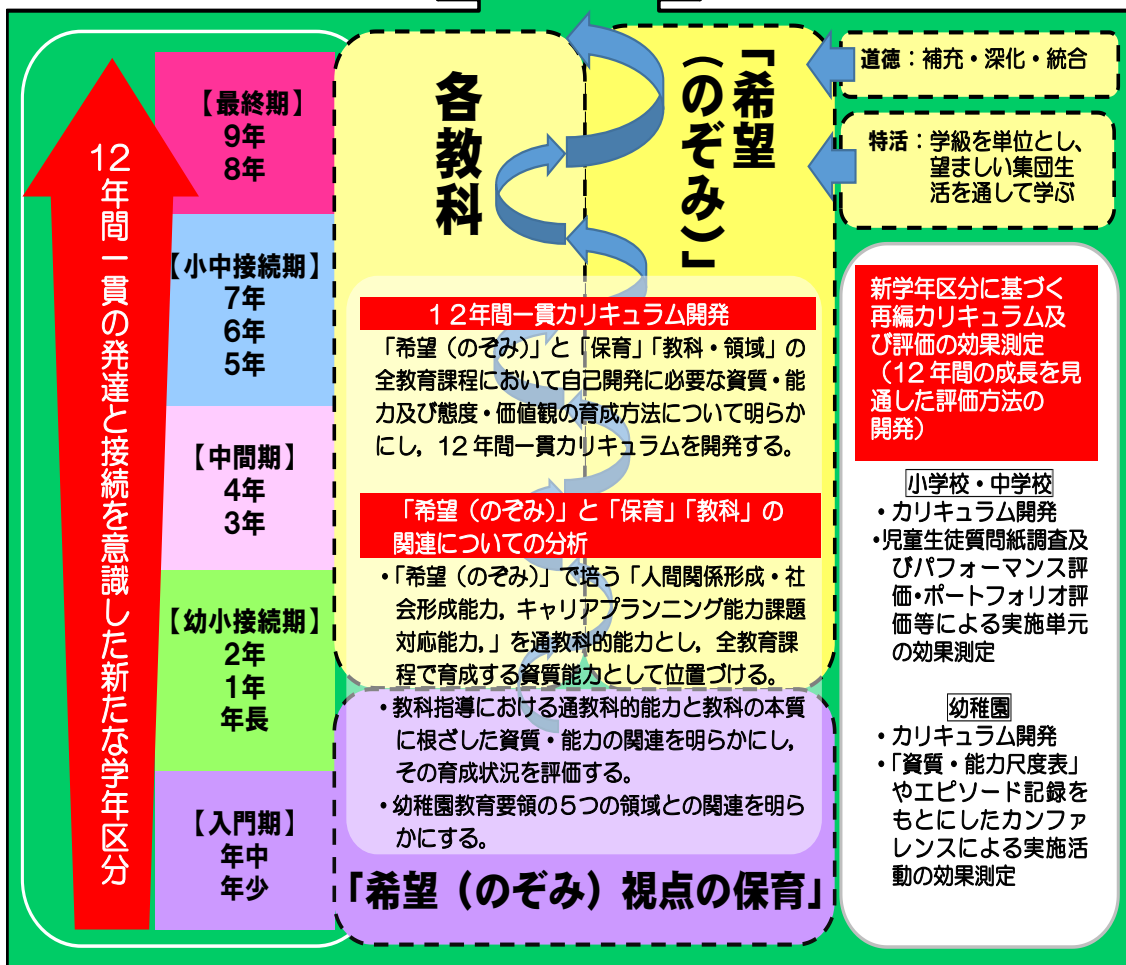


図 2 「希望 (のぞみ)」研究構造図

3. 平成 27 年度の取り組み

(1) 「希望 (のぞみ)」におけるグローバル人材の育成を目指した活動・単元の実施
 新領域「希望 (のぞみ)」及び「希望 (のぞみ) 視点の保育」においては、昨年度まで学習領域「つながりから」の中で、「国際コミュニケーション科」の研究を引き継ぎ、異文化への理解や実践的なコミュニケーション能力の育成をめざし、「国際」を柱とした実践を行ってきた。この間、開発した活動や単元では本学校園のめざす子ども像に向かっていくため、社会のグローバル化に対応する資質・能力である「人間関係形成・社会形成能力」と合わせて態度・価値観「共生」の育成に重点的に取り組んだ。今年度もその取り組み自体は継続して行い、更には、「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力」、態度・価値観である「自律」「参画」の育成にも取り組んだ。

(2) 保育・教科等におけるグローバル人材の育成を目指した活動・単元 (題材) の開発

保育・教科等においては、グローバル人材の育成を念頭においた活動・単元の開発を行った (表 2)。その中には、教科間の単元・題材の接続および交流を行ったものがある。そのようにすることで、各教科で習得した知識・技能をどの教科においても発揮できるようにするとともに、地域社会へ向けた実践にも活用できるようにした。

表 2 小学校・中学校で行ったグローバル人材の育成を目指した単元 (題材)

交流相手	学年	教科等	実践内容	改善点
	4 年	社会	グローバル化に対応したクールジャパン戦略 (キャラクタービジネス) の将来性について学習を行った。	「文化」に焦点化した「グローバル社会学習」の授業開発を行った。
海外からの旅行者	6 年	外国語活動 (一部新領域「希望 (のぞみ)」)	修学旅行地で出会った方々にインタビューをする。	同じ活動を 5 月の修学旅行時に実施した。
沖縄駐留米軍家族 (E-アドベンチャー)	8 年	特別活動 英語 美術	修学旅行地沖縄において、E アドベンチャーの活用により、沖縄駐留米軍家族との半日交流を実施した。美術科で作成した仏像・鳥獣戯画のカードをもとに交流した。	継続して取り組むとともに、夏休みには、平和に関する新聞記事の感想を英文で書くよう課題を提示した。
H27 年度パートナー校 (アメリカ合衆国)	7 年	美術	世界中の Art Links (クリエイティブ・コネクション) に所属する中学校が、共通のテーマで互いに絵を描き、作品を交換・鑑賞し、分析する。今年のテーマは「私たちのコミュニティ」であった。	団体関係者が来校したため、受賞した生徒が、自作を紹介する等の交流ができた。

(3) 実施の効果にかかわる評価・検証

① 「希望 (のぞみ)」におけるグローバル人材の育成にかかわる評価・検証

幼稚園は、「希望 (のぞみ) 視点の保育」を通して社会のグローバル化に対応する資質・能力を子どもが好きな遊びを見つけて遊んでいる時の一人ひとりの様子から 4 段階の評定に照ら

し合わせて評価した。態度・価値観については、社会のグローバル化に対応する資質・能力全てが生まれ、行動として表れた姿を「自律」「共生」「参画」の態度・価値観の芽生えが育まれている状態ととらえた。そこで、3つの資質・能力の4段階評定の合計をもとに、態度・価値観の変容を学年ごとに分析した。また、教師が書き留めたエピソード記録を用いた評価も行った。小学校・中学校は、5月と11月の児童生徒質問紙等調査の結果を比較し、社会のグローバル化に対応する資質・能力や態度・価値観について検証した。また、単元の事前事後のアンケートや質的な変容を見取るために、パフォーマンス評価・ポートフォリオ評価等を実施したりしながら実践事例を作成した。詳細は、文科報告書別冊に記載している。

②保育・教科等におけるグローバル人材の育成にかかわる評価・検証

後述する中学校における英語科と美術科における教科間連携による英語とアートを通したグローバル教育交流では、本年度は次の評価方法を実施した。単元・題材の事前事後に質問紙調査を実施、生徒のふり返りの内容分析、授業中の観察記録の内容分析、具体的指標による作品の達成度分析を行い、通教科的能力と関連的に育む教科の本質に根ざした資質・能力の育成の在り方を見とった。また、外部評価としてアメリカのアートリンク担当者やショートステイ家族からのコメントの内容分析をした。

4. 実践報告

(1)「希望(のぞみ)」におけるグローバル人材の育成を目指した活動・単元の実施

①幼稚園

幼稚園では、留学生交流活動を9月から計5回行った。尚、今年度は交流活動の中で、社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観を育成するため、意図的に場面設定を行い、その場面に対応した具体的な姿も設定した(表3)。

表3 社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観を育成するための場面とグローバル人材の育成につながる具体的な姿

場面	具体的な姿
日本語が通じない留学生と出会う。	① 自分たちの言葉が留学生に通じないとわかっているも、一緒に遊ぼうと思っすすんでかかわっている。
留学生が困った表情をしている。	② 留学生が困っていたら、「どうしたの？」などと尋ねながら自分からかかわっている。
	③ 留学生が困っていることを解決しようと自分なりに考えて行動している。
言葉の違いから留学生に自分の思いや考えなどが伝わらない。	④ 自分の思いや考えなどをわかってもらうためにいろいろな方法を考え、実際に試している。
留学生から「日本の子どもたちの遊びや歌が知りたい」という話がある。	⑤ 「日本の子どもたちの遊びや歌が知りたい」と思っている留学生に対し、どの歌や遊びがよいか、またどうやって教えるかを自分たちで考えている。
	⑥ 選んだ歌や遊びを自分たちで考えた方法で教えている。

○実践例 第5回交流(2月):年長

【背景】

これまで続けて来園している留学生と最後の交流となる日、みんなでドッジボールをするこ

とになった。しかし、留学生はドッジボールを知らないため、子どもたち自から留学生にルールについての説明をし始めた。

「オーケー」

園庭に出ると子どもたちが「ドッジボールはねえ・・・」と言いながら、ボールを投げたり取ったりする表現やコートを目指さなどをしている。留学生は子どもたちがしていることを一生懸命見ている。どうやら、ドッジボールがボールを使った遊びであることは理解できたようだが、ルールまでは理解できていない様子である。すると、A児が地面に人



図3 小さなコートに入って身振り手振りでルールを説明

が一人入れる程度の小さなコートを描き、ボールを持ったB児とその小さなコートの中に入って「こうやって投げるんよ。それで当たらんようにするんよ」と言いながら身振り手振りを加えて説明を始める。続けて、C児が「こうよこうよ」と言いながら地面に、A児が描いたものよりも少し広めのコートを描く。更に「これが人でね・・・」と言いながらコートの中にたくさんの丸を描き始める。人差し指をボールに例え、コート内を行ったり来たりさせている。そして、「当たったらね、出るんよ」と言いながらコート外に向かって線を引く(図3)。D児も「出た人はこっちに向かってボールを投げられるんよ」と言いながらコート外から相手コート内に線を引く。留学生が「ウンウンウンウン」と言いながら大きく頷き、「オーケー」と言っている。D児が「よっしゃあ！これで一緒にできるよ」と言い、留学生の手を引き、みんなでドッジボールのコートに向かう。

○実施の効果

幼稚園における社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観にかかわる子どもたちへの効果(表4及び表5)は次の通りである。

表4 資質・能力にかかわる子どもの変容 (差: 10月-6月)

能力	評定	尺度	年少			年中			年長		
			6月	10月	差	6月	10月	差	6月	10月	差
キャリアプランニング グ能力	4	【当番活動(クラス中のお手伝いを含む)及び片付けをする場面】周囲の状況を見ながら、自分からすすんで、最後まで取り組んでいる。	0%	0%	0%	0%	3%	3%	10%	36%	26%
	3	【当番活動(クラス中のお手伝いを含む)及び片付けをする場面】自分からすすんで、取り組んでいる。	0%	60%	60%	21%	42%	21%	46%	36%	-10%
	2	【当番活動(クラス中のお手伝いを含む)及び片付けをする場面】頼まれたことを、取り組んでいる。	40%	30%	-10%	79%	55%	-24%	34%	15%	-19%
	1	【当番活動(クラス中のお手伝いを含む)及び片付けをする場面】頼まれても取り組もうとしない。	60%	10%	-50%	0%	0%	0%	10%	0%	-10%
人間関係形成・社会 形成能力	4	【人と関わっている場面で】いろいろな相手に対して(同年齢、異学年、教師など)相手の様子をみながら、相手の思いを聞いたり、自分の思いをくわしく伝えたりすることができる。	0%	0%	0%	0%	0%	0%	12%	46%	34%
	3	【人と関わっている場面で】相手によっては(気の合う友だちや教師など)相手の様子をみながら、相手の思いを聞いたり、自分の思いを伝えたりすることができる。	5%	40%	35%	27%	58%	31%	54%	44%	-10%
	2	【人と関わっている場面で】相手によっては(教師や気の合う友だちなど)自分の思いを伝えることができる。	95%	60%	-35%	73%	42%	-31%	31%	10%	-21%
	1	【人と関わっている場面で】他者と関わろうとせず、他者に自分の思いを伝えようとしない。	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	-2%
課題対応能力	4	【好きな遊びの時間でやりたいことを見つけたとき】自分の目的に向かって、さらにいろいろな方法を試したり、自分の考えた方法を繰り返したりして改良していく。(前提:友だちと一緒にでも、ひとりでもいっしょに)	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	34%	29%
	3	【好きな遊びの時間でやりたいことを見つけたとき】自分の目的に向かって、いろいろな方法を試したり、自分の考えた方法を繰り返したりする。	0%	40%	40%	21%	55%	34%	56%	56%	0%
	2	【好きな遊びの時間でやりたいことを見つけたとき】対象に興味をもって自分で考えたり、友だちと同じ方法を試したりする。	85%	60%	-25%	79%	45%	-34%	24%	10%	-14%
	1	【好きな遊びの時間でやりたいことを見つけたとき】躊躇してやらなかったり、あきらめたりする。	15%	0%	-15%	0%	0%	0%	15%	0%	-15%

資質・能力について、年少では「キャリアプランニング能力」について評価3が60%増加し、年中では、「課題対応能力」については、評価3が34%増加した。年長では、「人間関係形成・社会形成能力」について、評価4が34%増加した。

「自律」「共生」「参画」の価値観について年少は、価値観の変容の3点増加が学年の中で45%を占め、年中は増減なしが学年の中で36%を占めた。年長では2点増加が学年の中で22%を占めるという結果であった。

また今年度、留学生交流活動を行ったことによる成果となる子どもの姿として次のことが挙げられる。

- 日本語が通じない留学生に出会うことで、当初、子どもたちはとまどいを隠せなかったが、言葉が理解できなくとも徐々に聞こうとし、自分の思いを日本語に身振り手振りを加えたり、絵を描いたりしながら一生懸命伝えようとしたりする姿が見られた。
- 自分が得意としている遊びを積極的に紹介したり、「一緒にやろう」と声をかけたりする姿が見られた。この時、遊び方がわからず、留学生が困っているということを教師に教えてもらうと、留学生にとってよい方法を自分で考えて粘り強く教えていた。
- 「日本の子どもたちの歌や遊びが知りたい」という留学生のことを思い、初めてでもすぐに覚えられるものや日本にしかないものをみんなで考えて選ぶとする姿が見られた。

一方で、課題として次のような姿があった。

- 留学生が困った表情をしている時、その状況に気づいていても自分からかかわろうとする姿は見られなかった。これは、初めて出会う留学生に対する緊張やどのように対処してよいかわからなかったということが考えられる。

②小学校・中学校

○小学校

5年生「希望（のぞみ）」では、本年度、広島大学の留学生と交流する活動を通して、異文化への興味・関心を高め、自ら異文化について学びたいという気持ちを育み、自分と異なる国や言語の人々を理解しようとするこの大切さを感じたり、多文化共生社会を生きていこうと願うことができるようにすることをねらった。そのため、交流の場面では日本語をできるだけ使わず、単語やジェスチャーで関わることを子どもたちと約束して活動に取り組んだ。

表5 態度・価値観にかかわる子どもの評定の変化

学年	価値観の変容 (6月-10月)	人数	全体に対する割合
年少 (20名)	+3	9	45%
	+2	6	30%
	+1	2	10%
	0	2	10%
	-1	1	5%
年中 (33名)	+3	2	6%
	+2	7	21%
	+1	11	33%
	0	12	36%
年長 (41名)	-1	1	3%
	+4	2	5%
	+3	10	24%
	+2	18	44%
	+1	8	20%
	0	3	7%



図4 課題について語り合う

また、本単元は、本学校園における社会のグローバル化に対応する資質・能力の中の「課題対応能力」育成に焦点化して取り組んだ。そのため、交流会を2回設定し、第1回目の交流会における自分たちの課題を見つめ、その課題を修正して第2回目の交流会に取り組むことができるようにした。交流会に向けての準備の時間や自分と向き合う時間を十分に確保し、考えを深めることで、課題を自分事として捉え意欲的に取り組むことができるようにした。

○中学校

9年生「希望（のぞみ）」では、12年間の集大成の行事であり、今年で11年目を迎えるピースプロジェクトにおいて、生徒は事前学習として昨年度より5月に広島平和記念公園にて現地リハーサルを行っている。その際、平和公園に訪れている外国人観光客にインタビューをするなど、英語によるコミュニケーションに果敢にチャレンジした。



図5 ピースプロジェクト

7月7日に実施したピースプロジェクト本番については、交流相手の先生方に平和への考えを英語にまとめ、それを色紙に綴るってプレゼントした。交流では、事前に準備した英文カードを参考にしながら、平和の碑を説明したり、昼食を楽しんだりした後、平和についての意見交流を行った。

○実施の効果

小・中学校における社会のグローバル化に対応する資質・能力及び態度・価値観にかかわる子どもたちへの効果（表6）は次の通りである。

表6 資質・能力及び態度・価値観の肯定的回答の平均点の推移（単位：％）

	質問項目	全体			
		4月 肯定	7月 肯定	10月 肯定	差 10-4月
人間関係形成・社会形成能力	1 相手の気持ちを考えながら、声をかけたり関わったりすることができる。	91	92	93	2
	2 友だちの様子などをみて、どうしたらいいか考えて行動することができる。	90	90	91	1
	3 声の大きさや話し方に気を付け、聞き手にわかりやすく話すことができる。	83	85	86	3
	平均	88%	89%	90%	2%
課題対応能力	4 物事に取り組む時、計画を立てて行動することができる。	81	82	82	1
	5 今、目標を持って頑張っていることがある。	85	86	85	0
	6 新たに挑戦してみたいことがある。	83	81	83	0
	7 最後まであきらめずに物事に取り組むことができる。	87	85	90	3
平均	84%	84%	85%	1%	
キャリアアップ・ランニング能力	8 学校で係や委員会の仕事をすることは大切なことだと思う。	96	97	98	2
	9 勉強することには意味があると思う。	97	97	98	1
	10 学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えることができる。	86	87	87	1
平均	93%	94%	94%	1%	
参画	11 学校をよりよくするための方法を考えようとしている。	72	71	71	-1
	12 学校生活の中の問題を見つけようとしている。	66	66	66	0
	13 問題解決の計画を立てようとしている。	64	65	67	3
	平均	67%	67%	68%	0%
共生	14 話す人の気持ちを考えながら、話を聞こうとしている。	90	90	92	2
	15 自分の考えを出して話し合おうとしている。	83	81	84	1
	16 いろいろな人たちといっしょに話すことは楽しいと思う。	95	93	96	1
	平均	89%	88%	90%	1%
自律	17 自分のやるべきことを最後までやろうとしている。	94	92	93	-1
	18 「なりたい自分」に向かって取り組もうとしている。	90	90	90	0
	19 自分が立てた目標を意識して生活しようとしている。	87	87	89	2
	平均	90%	90%	91%	1%

年3回実施した資質・能力及び態度・価値観に関する児童生徒質問紙調査の結果から、肯定的回答の割合が「人間関係形成・社会形成能力」では90%、「課題対応能力」では85%、「キャリアプランニング能力」では94%であった。また、「共生」と「自律」についてもその肯定的回答の割合が90%を超えていた。この結果より、本学校園における取り組みが、社会のグローバル化に対応する資質・能力を育成する上で効果的であったことが窺える。

例えば、5年生においては、社会のグローバル化に対応する資質・能力における「なるべき自分の姿」を設定し、自分と向き合うノートを活用して毎時間、自己評価・他者評価活動に取り組むことで、自分の成長や課題を見つめながら主体的に学びを創り出す姿を引き出すことができた。本単元では、「できるだけたくさん英語で質問して欲しい」と留学生の方々をお願いをして1回目の交流会を迎えた。その結果、「留学生さんが何を言いたかったのかよく分からなくて悔しかった。」「言葉の違いを超えるためにはどうしたらいいのか。」「留学生になんとか自分の考えや想いを伝えたい。」という意欲や課題意識をもつことができた。そして、2回目の交流会に向けて、外国語の時間での学びとつなげた取り組みを行うことを通して、自分たちの学校の様子を簡単な英単語やジェスチャーだけで伝える方法を考えることができた。その後、2回目の交流会を通して、「自分の考えを何とか伝えることができてとても嬉しかった」「留学生さんが何とか受け取ってくれようとしている姿に感謝の気持ちをもてた」「外国の方とコミュニケーションを取ることは、すごく楽しいことだと思った」などの想いを抱く姿が見られた。つまり、本単元の活動は、子どもたちに異文化理解や異文化コミュニケーションへの意欲を高めることにつながる内容であったことが窺える。

(2) 保育・教科等におけるグローバル人材の育成を目指した単元（題材）の開発

グローバル人材の育成を目指した、保育・教科等における今年度の取り組みの一例を述べる。尚、この取り組みは、グローバル人材育成の対応表（表1）の「要素Ⅱ」にある主体性・積極性・チャレンジ精神及び「要素Ⅲ」の異文化理解に関連するものである。

中学校における英語科と美術科における教科間連携による実践の1つとして、英語とアートを通したグローバル教育交流を行った。本研究は中学校の教科担任がグローバル人材の育成を意識して、教科間の単元・題材を接続および交流することにより、習得した知識・技能を地域社会へ向けた実践に活用させ、通教科的な実践力（人間関係形成・社会形成能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）の育成の在り方を明らかにすることを目的とした。本年度は次の2つの活動を実施した（実践の詳細については、広島大学学部・附属学校共同研究紀要2015第44号に掲載）。

①アートルック：これは、世界56か国に所在する生徒に、美術という媒体を通じてお互いの文化や生活様式等を紹介し合い、異文化の発見を促す活動である。活動目標は生徒が外国に住む同世代の子どもたちの生活への認識を高め、理解すること、生徒が新しい視点で自分自身が持つ文化を見直せるようになること、考えを伝える手段として、生徒が美術の持つ力を発見することの3点である。これを美術科と英語科が連携しながら、グローバル教育の視点を

持って進めた。開発する単元は、7年生(中1)の美術科「社会を明るくするポスターの作成」英語科「作品を英語で紹介する」である。完成したポスターと自己紹介を、英語のビデオレターとして作成し、パートナー校へ送り、交流した。

②修学旅行でのショートステイ活動：この活動は8年生(中2)の12月に沖縄で実施し、半日アメリカ人の家庭で英語を用いてコミュニケーション活動を行う。この取り組みに対する具体的な活動は、美術科「絵巻物や鳥獣人物戯画の模写」英語科「鳥獣人物戯画」の単元を接続し、英語で日本文化の紹介カードを作成することである。この活動の目標は2つあり①コミュニケーション能力を高めること、②自国の文化を知り、発信する力をつけることである。このような実践研究を通し、2教科にまたがる一連の学習において、美術を交流に生かしながら、より効果的に各教科のねらいを達成するとともに、グローバルな視点を持って通教科的な実践力の育成に取り組んだ。

5. おわりに

今年度、本学校園は社会のグローバル化に対応する資質・能力を育成していくために学校教育活動全体を通して育成に取り組んだ。本稿の実践報告や実施の効果からわかるように「希望(のぞみ)」においては、幼小中12年間の系統性のある活動及び単元を行うことで、資質・能力及び態度・価値観を子どもたちに着実に育んでいくことができた。また、保育・教科等では、中学校の英語科と美術科の取り組みのように、教科担任がグローバル人材の育成を意識し、教科間の単元・題材の接続および交流を行うことで、自国の文化の良さに目を向けたり、観賞しての気づきなどを外国の方に伝えたりする新たな活動・単元を開発することができた。

一方で、幼小中一貫の取り組みとしながらも評価方法に関しては、12年間の成長を見取る系統性のある方法を開発するまでには至っていない。今後は、12年間の系統性をもたせた評価方法を開発していくことが課題であると考えている。

文献

- 1) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成20年度研究開発実施報告書第6年次』2009
- 2) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『研究開発実施報告書 平成26年度(第3年次)』2015
- 3) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『平成27年度第17回幼小中一貫教育研究会紀要』2015
- 4) 広島大学研究推進委員会『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅲ 一大学と連携した研究開発システムの構築に向けて一』2015
- 5) 広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校『研究開発実施報告書 平成27年度(第4年次)』2016
- 6) 広島大学学部・附属学校共同研究機構『学部・附属学校共同研究紀要第44号』2016